

人生の選択肢

我が家に初めてテレビが来たのは、丁度、昭和



32 野原敏裕 名古屋北労働基準監督署長

39年東京オリンピックの年だった。この頃には、多くの家庭にテレビが普及していたのではないだろうか。私は未だ小学1年だったので、記憶はあ

いまいであるが、マラソンが行われた日、早く家に帰ってマラソンを見なさいと先生に言われた記憶がある。金メダルは裸足のアベベだったが、2位で国立競技場に入ってきた円谷が、長身のヒートリーに追い抜かれて3位になってしまった映像を今でもはつきりと覚えている。

その後、家族団らんを中心にテレビがあり、1年365日、視聴時間はともかく毎日テレビをつけている。また、以前は、放送時間にしか見たい番組は見れなかったが、今は、ビデオを録って、いつでも、どれだけでも見れるようになった。よって、テレビを見る時間は、子どもの頃に比べる格段に増えている。最近、子どものスマホ依存症などが問題となっているが、テレビは、ス

マホのような危うさはないものの、テレビのない時代に比べれば、家族の会話が減ったり、話題がテレビの話題に固定されてしまうなど、いろんな弊害があるのかもしれない。テレビは、いち早くいろんな情報を伝えたり、緊急時に映像で情報を流



すことができ、社会で必要なものであるが、それ以外は、やはり娯楽を与える道具であると思う。ただ、数年前、「ダンダリン労働基準監督官物語」が放送されたが、この番組により監督官試験の受験生が急増するとい

影響ははかりしれないものがあると思う。

2年ほど前、「素敵な選TAXI」という竹野内豊主演の番組があり、先月はそのスペシャルが放送された。「選TAXI」とは、「選択肢」とタクシーをかけた言葉であるが、番組は、主人公

のタクシー運転手が、乗客が望む過去の時間、場所まで連れて行くという、どちらかというとコメディであった。多くの場合は、失敗した場所、時間まで戻り、失敗をやり直し、違う人生を歩んでいくというストーリーであった。

さて、誰にもいろんな場面での人生の分岐点があったし、これからの人生もあると思う。大きなところでは、就職と結婚であろうか。私も、あの時、違う選択をしていれば全く違う人生であったかもしれないと思っ

から、選タクシーに乗るつもりはない。

また、日々においても我々は小さな選択をしながら暮らしている。朝、着る服、朝食の内容、出勤する時間、乗る電車の車両とか特に選択しているつもりはないが、結果としてはいろんなものの中からそれを選んでいく。少しでも、自分にとって良い選択をしたいものだが、労災事故に遭ってしまった方、その加害者になってしまった方、関係事業主の方の中には、どこかで何かの選択肢を誤らなければ事故はなかったと後悔されている方もいると思う。事故は災害発生プロセスのなかで起こるものであるが、事故を起こすような選択肢があったとすれば、絶対に誤らないようにしたいものだ。

イラスト・森沢康代